



春季公開講座を実施しました！

令和6年5月11日(土)、中部学院大学教育学部 子ども教育学科 教授 西垣 吉之先生を講師としてお迎えし、春季公開講座をWEBで実施しました。テーマは、「幼児理解と家庭や専門機関との連携について～幼児理解に根差した保育～」です。332名の先生方にご参加いただきました。以下に研修後のレポートでお書きいただいた内容を紹介いたします。

<研修から学んだこと>

- 保育をするにあたり、子どもたち一人一人を理解することは日々の保育の中で大切にしていますが、改めて課題よりも先に子どもたちを肯定的に見るということ、子ども達一人一人が遊びの何に面白さを感じているのかを読み取ること、同じ到達点を目指すのではなく、その子の課題を見いだすことの大切さを再確認しました。
- 子どもが育つということは、過程(プロセス)が大切で、保育士が正しいやり方や知識を教えるのではなく、過程と一緒に楽しむことで、子どもが社会で生き抜いていく力(非認知能力)を培うということ。
- 気になる子とは、気にしてあげなければならない子、振り回されてあげなければいけない子。大人を振り回す体験が自己肯定感を育む。この体験が育ちの過程で欠落すると、自身の感情とうまく付き合えなくなる。特性を持った子どもとの関わりとして、健常児を目標にし、クラスに適応させることや、健常児に近づけることがインクルーシブではない。安心・安定して過ごせることや、思いや状況の理解に努めるといったその子その子のニーズに合わせた個性の尊重が重要である。

<今後の保育実践に生かしたいこと>

- 特別な配慮を必要とする子どもの保護者への対応の仕方についての学びから、保護者の気持ちに寄り添うことの重要性を学んだ。私たち保育者はどうしても、子どもに気になる様子があると病院受診や発達検査を保護者に勧めようと先走って話してしまうことがある。しかし、発達検査等の話をする前にまずは、保護者の気持ちに寄り添いながら信頼関係を築いていくことを第一にやっていくことが必要なのだろうと思った。そして、信頼関係が構築できた所で保護者の方が間違えた意味で捉えてしまわないよう言葉遣いに気を付けながらお子さんの様子を伝え、支援に繋げていきたいと感じた。
- 毎日、声を掛けてあれこれしながら興味を引いて…1ヶ月たって今まで参加できなかった朝の会にこの間初めて自分から教室に入って参加できました。あれが振り回されてあげたことからの繋がりの行動だったのかなととても腑に落ち、明日からの保育に肩の力を抜いて子どもと向き合える、そんな気持ちが持てました。振り回されてあげることが子どものどんな成長の姿に繋がっていくのか、今からとても楽しみです。
- これからの保育では、一人一人の子どもの姿を肯定的に見ていきたいと思いました。そして、安易に思い込むのではなく、想像や推測をしながら関わっていきたいです。「子どもが育つためにはプロセスが大切」ということを忘れずに、過程と一緒に楽しめる保育者でありたいと思いました。

保育者としての哲学を持つ、「大人はすでに分かっている世界を生きている」「子どもは分かるまでの過程を生きている」西垣先生のこの言葉に、強く打たれるものを感じました。やはり、保育者としての哲学を持ち、子どもと相対する存在でなくてはならない思いを新たにしました。また研修の最後に、「保育・親支援における受容と非受容の意味に関する考察」に係る事例を紹介いただきました。保育の現場では、子どもの主体的な学びが強く求められています。主体的な学びは決して子どもが自由に何でもできる活動ではないことは当然です。だから、こどもの願いをどう受容するか、この決め出しに多くの保育者が悩んでいるのではないのでしょうか。西垣先生のお話は、そんな私たちの悩みに対し、大きなヒントを与えてくれたと感じました。(専門員)